■トランスフォーメーション（変革の時代）の為の視点の転換、
教会の奥義と実践

# 「日本の変革の為に」

全日本リバイバルミッション代表・
リバイバル聖書神学校校長
有賀喜一師

## 1．日本への預言

「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、私が親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。」（第二歴代誌 7 章 14）

「望みを持つ捕らわれ人よ。とりでに帰れ。わたしは、きょうもまた告げ知らせる。わたしは二倍のものをあなたに返すと。わたしはユダを曲げてわたしの弓とし、これにエフライムをつがえたのだ。シオンよ。わたしはあなたの子らを奮い立たせる。ヤワンはあなたの子らを攻めるが、わたしはあなたを勇士の剣のようにする。主は彼らの上に現われ、その矢はいなずまのように放たれる。」

（ゼカリヤ書 9 章 12 節～ 14 節）

「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」（ゼカリヤ書 4 章 6 節）

「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄々しくあれ。恐れてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである。」

（ヨシュア記 1 章 9 節）

これらのみことばは、以前、アルゼンチンで開催された「第 2 回　収穫伝道国際研修会」での「カルロス・アナコンディア師」「シンディ・ジェイコブ師」「ピーター・ワグナー師」の各師をとおして日本の将来を預言的に祝福して言われたものです。それは日本の罪の悔い改めと和解、更に神ご自身の赦しと励ましと、やがて日本は変革され、かつての悪の戦士だった日本が、義の戦士となり（日本の地図を逆さにしてみると、まさに「勇士の剣」のように見える。）神の国の建て上げの為に日本は必ず用いられると確信づけるものでした。

そしてその時はすべてが神の主権のもとで、リバイバル、変革、時、方法、場所など、まさに聖霊によって成就していくことを保証するものでした。エペソ書 1 章 17 節～ 19 節においてのパウロの祈りの中心は、「心の目がはっきり見えるように」なることです。ここにトランスフォーメーション（変革）の第一段階があります。

## 2．視点の転換（ヨシュアビジョン）

教会がこの 2000 年の期間を経て、神は全世界のキリスト教会を整え、そのすべての霊的遺産を尊重し、そしてそれを駆使して、全キリスト教会を聖書的一致へと導き、福音のすべて（即ち、救い、いやし、解放、奇蹟、きよめ、聖霊のバプテスマと充満）をみことばに伴うしるしとして提供して、未だ福音化されていないあらゆる国民、部族、民族、国語の人々を、私たちの主イエス・キリストに属するものとするのです。

これらのことにより 21 世紀にまさに変革への整備ができあがりました。そしてその変革の第一歩は「神の視点で見直す」ことです。これを私は「ヨシュアビジョン」と呼びます。

（1）主の命令～　ヨシュア記 1 章 2 節～ 3 節
（2）主の勝利～　ヨシュア記 1 章 4 節～ 6 節
（3）主の条件～　ヨシュア記 1 章 7 節～ 8 節
（4）主の約束～　ヨシュア記 1 章 9 節

最初に神の視点で見直すことは、1971 ～ 72 年、私がアメリカ、フラー神学大学院、世界宣教と教会成長学部に留学した時、初めて「マッギャバラン博士」をとおして植え付けられたものでした。当時、第三世界では、クリスチャン人口が、アフリカで何と平均 65 パーセント、インドのナガランドでも 90 パーセントと報告され、真の神の主権的勝利が崇められていました。故に日本の敗北主義、悲観主義は、全く打ち負かされました！神は今生きておられ、力強く働いておられることを実感しました。



さらに神の視点で見直すことは、以前、ラテン・アメリカの 6 ヶ国を歴訪した時、当時「深みの伝道」と称して、先ずクリスチャンひとりひとりを主の生きた証人として整え、更にそれらが社会のすべての階層に浸透し、その結果、多くの魂を救いへと導き、それらが生きた共同体である教会に加えられ、やがては健康な教会成長を遂げていく、そんな状況を見て、聞いて、確かめて、公平な神は、必ず日本にも同じこと、いや、それ以上の事をなし遂げられると堅く信じたのでした。

そして、3 つ目の神の視点で見直すことは、1972 年 4 月から 40 日間、アフリカのケニヤの首都ナイロビから 250 マイル、ジャングルに入ったある研修所で、アフリカ全土から 96 人の代表たちとともに、「福音の伝達と教会成長」の学びがあり、参加が許されて直接アフリカで教会のリバイバル、しかも継続しているリバイバルの実態に触れました。その時、私が感じたことは、あまりの貧しさのゆえに子供が病気になっても町の病院にも連れて行けない現実の中で、神に必死に祈り求める姿、そしてその必死な祈りに、不思議と偉大な奇蹟をもって応えておられる、神の業の生きた証しを見聞きし、福音が人々の必要を事実満たしているというすばらしさを見たのでした。

しかし、何よりも、神の視点で見直すことは、聖書そのものでなされなければなりません。私自身、長年のエペソ人への手紙の研究から「キリストと主の教会」の奥義と実践を通して目が開かれてきました。

## 3．教会の奥義と実践
### （エペソ書からみる神の視点）

エペソ書 1 章には、奥義である教会の起源があり、三位一体の神ご自身こそが、ご自身の教会を建て上げられる源泉であることが明白に記されています。すなわち、父なる神は、私たちを選び（4 節）、あらかじめ定め（5 節）、恵みを与えてくださった（6 節）のです。子なる神、キリストは、罪の赦しを受けさせ、キリスト・イエスにあって一つに集めさせ（10 節）、彼にあって御国を受け継ぐ者と定められたのです。（11 節）そして、聖霊なる神は、救いの福音を聞かせ（13 節）、福音を信じさせ（13 節）、約束の聖霊をもって証印を押して、救いの確信にまで導かれるのです。このような三位の神のお働きを、聖霊によって開眼されるとき、神の召しの望み（エペソ書 1 章 18）、栄光の嗣業（18 節）、信じる者に働く神の絶対的な力（19 節）が体得させられるのです。

エペソ書 2 章では、奥義である教会の素材として、かつては、罪過と罪との中に死んでいた者（2 章 1 節）、この世、サタン、そして肉の欲の奴隷（2 章 2 ～ 3 節）であった者、最後に、生まれながら御怒りを受けるべき、亡びの子（2 章 3 節）であった者たちが、「引き上げる救い」（2 章 4 節～ 6 節）、「近づける救い」（2 章 12 節，13 節）、一つにする救い（2 章 19 節～ 22 節）を受け、神の家族、神の住まいとなるのです。

エペソ書 3 章では、奥義である教会の務めが明記され、「万物を創造された神の中に世々隠されていた奥義を実行に移す務めが何であるかを明らかにするためにほかなりません」（3 章 9 節）と明白にされ、恵みによる、啓示によって、恵みの賜物によって、一番小さな者に与えられたものであるとの使命感に立っているのです。

この教会の奥義の実践のために、パウロはエペソ人への手紙の中で第二の祈りささげます。これを私は、「実践の祈り」と呼んでいます。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように」（エペソ書 3 章 16 節）と。内なる人は、キリストの内住（17 節）、愛の広さ、長さ、高さ、深さの共有（18 節）、そして、神ご自身で満たされる（19 節）ことで完全に整えられるのです。

パウロはエペソ書 1 章から 3 章までに教会の奥義として、その起源、素材、そして務めを詳しく述べ、4 章から 6 章まで、教会の実践として、（1）軍としての歩み（4 章 1 節～ 16 節）、（2）個人としての歩み（17 節～ 5 章 21 節）（3）家庭人としての歩み（5 章 22 節～ 6 章 4 節）、（4）社会人としての歩み（5 節～ 9 節）を進め、そのために「御霊に満たされなさい」（エペソ書 5 章 18 節）と命じているのです。そして、「愛の歩み」（5 章 2 節）、「光の歩み」（5 章 8 節）「賢い歩み」（5 章 15 節）が全うできるのです。

パウロは、このようにして、教会の奥義と教会の実践を明白にした後で、霊的戦いを勧めています。そして、教会の勝利は決定的となるのです！「悪魔の策略に対して、立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身につけなさい。わたしたちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。」（エペソ書 6 章 11 節，12 節）これらは、「主にあってその大能の力によって強められ」（6 章 10 節）て初めて実現できるものです。

このエペソ人への手紙、生きて働かれる三位一体の神の視点で、宣教と教会を見るならば、まさに、ヨシュアが偉大な神のしもべ、モーセの後継者として立ち、絶対信仰、絶対服従でやり遂げたように、私たちも日本の変革のために、視点の転換をすることがその第一段なのです。■

■有賀師のＣＦＮＪに於ける１０時間の授業は、証しあり、ユーモアもあり、とても楽しく聞けて信仰がたてあげられる内容です。ＣＤ＆ＤＶＤご希望の方は、学院事務局までお申し込みください。